

富士山測候所の保存と活用を考える

よみがえれ富士山測候所

— 極地高所研究拠点としての活用シンポジウム —

6月26日 日 [13:00~16:30]

プログラム

● 講演

田部井 淳子氏 (登山家)

「世界の山々をめざして～富士山と青少年の自然環境体験」

三浦 雄一郎氏 (プロスキーヤー)

「日本の新しい高所科学の夢にかけて」

● プレゼンテーション

浅野 勝己氏 (筑波大学名誉教授)

土器屋 由紀子氏 (江戸川大学教授)

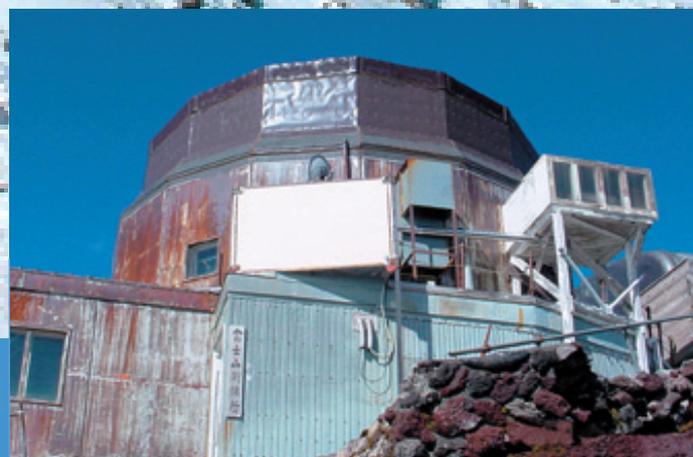
山本 智氏 (東京大学大学院教授)

● アピール宣言

会場

日本科学未来館 7階
「みらいCANホール」

東京都江東区青海2-41 TEL:03-3570-9151



主催 富士山高所科学研究会

後援 静岡県、山梨県、(社)日本山岳協会、日本登山医学会

お問い合わせ (財)静岡総合研究機構 TEL:054-249-1818 FAX:054-249-1820
富士山高所科学研究会 URL <http://fuji3776.net/>

富士山は大気健康診断に使えます



イラスト: つみだ ゆういちろう

よみがえれ富士山測候所

—極地高所研究拠点としての活用シンポジウム—

富士山は私たち日本人にとって特別な山です。四季折々に変化するその優美な姿は人々を魅了し続けています。また、富士山は美しいだけでなく、自然観測の場としてもたいへん大きな意味をもっています。1932年から山頂での通年観測がはじまり、1964年には富士山レーダーが設置され、台風をはじめとした気象観測の砦として、日本の技術者や科学者が誇るべきシンボルとなりました。

ところが、気象衛星の発達などにより山頂での気象観測の必要性は低下したとの判断から1999年にレーダー観測が停止され、2001年にはレーダードームも撤去されました。そして2004年10月には富士山測候所は無人工化されました。しかし、気象観測の必要性が低下したとしても、富士山頂に観測施設を設けておくこと自体の価値がなくなったわけではありません。環境科学、天文学、宇宙科学、高所医学、スポーツトレーニング学、地震火山学、先端材料技術、極限環境機器開発など幅広い学問領域でその活用が期待され、さらには教育、野外活動の拠点としての利用も考えられています。ハワイやヨーロッパアルプスなどの高所山岳には、このような自然観測や観察の拠点、自然科学の研究拠点となっている地点があり、そこではさまざまな分野で素晴らしい成果があがっています。このような利用価値の高い貴重な施設を無人化して放置することは、本当にもったいない!と思います。かけがえのない富士山測候所を有効に利用すべきであるとの我々のアピールにご賛同いただければ幸いです。

講師プロフィール

田部井 淳子氏

登山家、山岳環境保護団体・日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト代表。

1939年 9月22日、福島県三春町に生まれる
1969年 「女子だけで海外遠征を」を合言葉に女子登攀クラブを設立
1975年 エベレスト日本女子登山隊 副隊長兼登攀隊長として、世界最高峰エベレスト8848m（ネパール名：サガルマータ、中国名：チョモランマ）に女性世界初の登頂に成功
1992年 女性で世界初の7大陸最高峰登頂者となる
現在 年7～8回海外登山に出かけ、現在35か国の最高峰を登頂。

三浦 雄一郎氏

プロスキーヤー、クラーク記念国際高等学校校長

1932年 10月12日、青森市に生まれる。
1964年 イタリア・キロメートルランセに日本人として初めて参加、時速172.084キロの当時の世界新記録樹立。
1966年 富士山直滑降。
1970年 エベレスト・サウスコル8,000m世界最高地点スキー滑降（ギネスブック掲載）を成し遂げ、その記録映画 [THE MAN WHO SKIED DOWN EVEREST] はアカデミー賞を受賞。
1985年 世界七大陸最高峰のスキー滑降を完全達成。
2003年 次男（豪太）とともにエベレスト登頂、世界最高年齢登頂記録（70歳）樹立。アドベンチャー・スキーヤーとしてだけでなく、行動する知性人として国際的に活躍中。記録映画、写真集、著書多数。

プレゼンター

浅野 勝己氏

筑波大学名誉教授
専門：運動生理学、高所生理学

中高年の登山ブームの中、海外の高所に年間5万人が出かけている。しかし短期間なため高山病による遭難死が2.1%にも及んでいる。この高山病を予防する第一の方策は、富士山頂での高所順応を行うことである。欧米では富士山と同高度の山頂に、高所医学センターが古くから数多く設置されており、高山病の基礎研究が行われている。日本のシンボルである富士山を「健康増進」と「高所医学研究」を進展させる基地に是非したい。

土器屋 由紀子氏

江戸川大学教授
専門：大気化学、分析化学

「富士山の雨」に魅せられて15年。当初は「化学的にきれいな雨」に感激し、調べていくうちに「遠く大陸の大気の影響(長距離輸送)」「自由対流圏の大気」「雨のもとになるエアロゾルの化学成分」などの研究へと手を広げた。気象大学校、東京農工大学、江戸川大学と職場が変わるごとに、個性や持ち味の違う学生を連れて富士山に登っている。出身は農芸化学だが、富士山測候所が、自然科学だけでなく、すべての研究者が利用可能な開かれた観測所に生まれ変わることを夢見ている。

山本 智氏

東京大学大学院教授
専門：宇宙物理学、星間化学

1998年に富士山頂に口径1.2メートルのサブミリ波望遠鏡を建設して運用している。星間空間に存在する中性炭素原子のサブミリ波スペクトル線を観測して恒星が生まれる母体となる「星間分子雲」の形成と進化を探っている。冬季の富士山は気温が低く乾燥するので、観測の邪魔になる水蒸気が大変少ない。そのため、富士山頂は宇宙からのサブミリ波（波長1mm以下の電波）の観測において、世界でも最も優れた場所の一つである。その意味で、富士山頂は天文学の分野でも重要な意味を持っている。

富士山は4000mの観測タワーです



アピール宣言

- 1.富士山測候所をよみがえらせよう!
- 2.富士山測候所を環境と健康を守る砦(とりで)にしよう!
- 3.日本のシンボルをを世界のために活かそう!

イラスト：つみだ ゆういちろう

会場地図

日本科学未来館7階 「みらいCANホール」

東京都江東区青海2-41 TEL.03-3570-9151

■電車

新交通ゆりかもめ(新橋駅～有明駅)
「テレコムセンター駅」下車、徒歩約4分
「船の科学館駅」下車、徒歩約5分
東京臨海高速鉄道りんかい線(新木場駅～大崎駅)
「東京テレポート駅」下車、徒歩15分

